

『源氏友切丸』補記

——青本体裁、紅白絵外題の意味——

『源氏友切丸』は、明和三年（一七六六）に刊行されたと推定される鱗形屋板の五冊物の草双紙である。^(注一)現存資料としては国会図書館所蔵本と服部仁氏所蔵本が知られる。執筆者はかつて作品の影印と翻刻を紹介する機会を得たが、^(注二)その際、二つの蔵本について次のように言及した。

まず、国会図書館本は改装本で元表紙を欠くため、刊行時黒本と青本のどちらであったかは不明である。ただし、原題簽を伴っており、青色の料紙を用いた墨摺の外題簽と、紅色の料紙の絵題簽が一对となっており、この様式は、鱗形屋が初摺の新版に用いたものである。対し、服部本は原装を留めており、表紙は青本である。原題簽は国会図書館本のもと同板だが、使用した料紙は外題簽が紅色、絵題簽が白色となっている。鱗形屋の初期草双紙は、二枚題簽

松 原 哲 子

を使用した時期においては、初摺の際に青本体裁の表紙に青・紅の題簽を、再摺の際には黒本体裁の表紙に紅・白の題簽を使用していたものと推定され、^(注三)服部本はどちらにも当てはまらない。ただし、摺りの状態から再摺本と推定される。

青本体裁に紅・白の絵外題を貼付するという服部本の体裁は、管見の限り非常に稀な例である。資料紹介をした当時、この体裁の意味するところを決定づける材料が見当たらず、青本体裁であるこの蔵本を再摺本とすべきかどうかという問題については保留した。

ところが、先日、国会図書館本と服部本との間に一部詞章に差異のあるとの指摘を受けた。^(注四)巻四、十七丁裏・十八丁表の、源義朝が源氏重代の友切丸を持っているにもかか

わらず戦況が芳しくないのを嘆いていると、夢中に八幡大菩薩が現れる場面である。国会図書館本では、目をつむり微睡む人物の側に「ともながゆめのうち」と記されている。一方、服部本では「ともなが」が「よしとも」となっている【図版参照】。この場面には画面右手に義朝と朝長が甲冑姿で登場しているが、左手には微睡む義朝が描かれ、異時同図となっている。衣装や袖印も二人を明らかに描き分けている上、物語の展開上も微睡むのは義朝である。つまり、両書の違いは義朝の絵を「ともなが」とした誤りを正したことにより生じたことである。これは鱗形屋が一度正月の新版として初摺本を刊行したものを、板木に一部入れ木をし、再摺本を刊行したことを意味する。^(注5)つまり、青本体裁に紅・白の絵外題を付した服部本の装丁は、それが再摺本としての刊行であったことを示しているのである。

服部本の表紙に用いられている料紙は、鱗形屋が二枚題簽の様式を使用した明和期ごろの初摺と確定できる伝本の青本表紙に比べて、色の黄味が薄く、紙質も異なる印象を受ける。このこともまた、服部本が初摺の新版ではなく、初摺よりも下った時期に刊行されたことを示しているものと考えられる。

『源氏友切丸』は、鱗形屋板と鶴屋による求板本を合わせ



て少なくとも三度の刊行が確認できる。これまで現存する初期草双紙について調査してきた限りでも、五冊物の草双紙は再摺本と思われる伝本が少なくない。この傾向が五冊物についてのみいえるのか、それとも二冊物・三冊物についても及ぶのかなど、初期草双紙をめぐる諸問題について、今後丁寧で正確な調査を心がけて検討していきたい。

注

- 一 拙稿「明和三年刊鱗形屋板草双紙に関する検討」〔『実践国文学』第七十三号、平成二十年三月〕
- 二 拙稿『源氏友切丸』影印と翻刻」〔『実践国文学』第七十四号、平成二十年十月〕
- 三 拙稿「鱗形屋板絵外題考」〔『近世文芸』第八十七号、平成二十年一月〕
- 四 井部かよ乃氏の御教示による。
- 五 同一板木を利用した求板本として、他に鶴屋から刊行された『源氏友切丸』がある。これは、各巻初丁匡郭上部にみえる鱗形屋の商標を削除し、題名を改めて刊行されたものだが、これもまた「よしともゆめのうち」となっている。

付記 本稿を成すにあたり、資料の調査・掲載を許可下さいました服部仁氏をはじめ、各所蔵機関に深謝いたします。

（まつばら のりこ・実践女子大学非常勤講師
実践女子大学大学院博士課程平成十四年度単位取得満期退学）